



# 《マリア十五玄義図》再考 : 「神殿奉献」場面を中心に

宇埜, 直子

---

(Citation)

美術史論集, 14:55-72

(Issue Date)

2014

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81010451>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010451>



# 《マリア十五玄義図》再考

## ―「神殿奉献」場面を中心に―

《キーワード》ロザリオの祈り、神殿奉献、割礼、イエズス会

宇 埜 直 子

### 一、はじめに

十七世紀前半に日本人の手によって制作されたマリア十五玄義図はロザリオの祈りに関するものであることが指摘されている。<sup>1)</sup> 周囲を取り囲むように描かれたキリストとマリアの生涯の十五の場面(玄義)がロザリオの祈りに付随するものであるからである。現存するマリア十五玄義図は、京都大学所蔵原田家本(図1)と東家本(図2、茨木市立キリシタン遺物史料館架蔵)の二点があり、東家本は一九二〇年、原田家本は一九三〇年にそれぞれ先祖代々の開かずの櫃、民家の屋根裏に張り付けられた竹筒の中で発見された貴重な南蛮美術の遺物である。東家本の保存状態は決して良好とは言えないが、原田家本に先行するものとしてその図像を考えると考慮すべきものである。<sup>2)</sup>

原田家本は十五玄義図の名の通り、十五の玄義が四角いフォーマットで左辺、上辺、右辺を取り囲む。左辺下から「受胎告知」<sup>3)</sup>

訪問「生誕」「神殿奉献」「博士たちとの論議」、上辺左から「ゲツセマネの祈り」「答打ち」「茨の冠」「十字架への道行」「磔刑」、右辺上から「キリストの復活」「キリストの昇天」「聖霊降臨」「聖母被昇天」「聖母の戴冠」と順に続いている。画面中央は上下二層に分割されており、上には聖母子像、下には諸聖人及び聖餐の秘蹟とイエズス会のシンボルが描かれている。上層の聖母は右手に幼児キリストを抱き、左手に白い椿の花を持ち、<sup>4)</sup> 一方、幼児キリストは左手で地球儀を持つて右手で祝福を与えている。聖母子の両脇で唐草模様のある黄色い幔幕のようなものが左右で結ばれている。下層の中央、聖杯と聖餅の下にIHSがあり、両手を合わせたイエズス会の創始者聖イグナティウス・デ・ロヨラと、マントの下で胸を開く動作をする同じくイエズス会の聖人フランシスコ・ザビエルがこれを仰ぎ見ている。<sup>4)</sup> ロヨラの後ろには殉教具である斬首の斧を持つ聖マティアス、<sup>5)</sup> ザビエルの後ろには目を持つ聖ルチアがいる。上下を分ける帯の上にはLOWADO SEIA O SANCTISS (IM) O

SACRAMENTO (いとも尊き秘蹟たつとれたまえ)と、また最下部の帯には各聖人の名が書かれている。東家本もほぼ同じ構図を取るが、下部の聖人はロヨラとザビエルのみで、三方を取り囲む十五玄義図の諸場面にはヴァリエーションがある。

ロザリオの祈りはカトリック教会において広く親しまれるもので、数珠を繰って数えながら天使祝詞(アヴェ・マリア)を詩篇と同じ数、つまり百五十回唱え、その間に十五の玄義を冥想するものである。<sup>6</sup>十五の玄義は伝統的に、五つずつ、喜び、悲しみ、栄光の三つに分けられ、それぞれは《マリア十五玄義図》の各辺の通りである。ロザリオの祈りの特性はキリストとマリアの生涯を冥想することにあるため、本図のように、その冥想を助けるために玄義の諸場面が祭壇画の周囲、もしくは画中に描かれた。しかしながら、西洋の図像伝統では、十五玄義図のみで表されるものもあるが、「ロザリオの聖母」とともに表されるものが圧倒的に多い。<sup>7</sup>「ロザリオの聖母」のイコノグラフィは、聖母子が聖ドミニクスや諸聖人もしくは信心会のメンバーに、ロザリオの数珠ないし薔薇の花冠を授けるといふものなので(図5、6)、マリア十五玄義図は西洋の図像伝統から逸していると言える。《マリア十五玄義図》の聖母子に關しては、源泉となった版画が判明している。福井の旧家から発見されたトマ・ド・ルー版刻の《薔薇の聖母子》(東京国立博物館)である。この版画では聖母は薔薇、幼児キリストはロザリオの数珠を手にしており、西洋の一般的なロザリオの聖母子像のイコノグラフィの範疇であるが、一方《マリア十五玄義図》の聖母が持つのは日本の伝統的な花である白い椿であり、幼児キリストが持つのは

数珠ではなく十字架の立った球体である。この球体は「救世主としてのキリスト」の持物であるが、日本に現存する作例には「救世主としてのキリスト」像が比較的多い。<sup>8</sup>ルイス・フロイスの一五八四年十二月十三日付のイエズス会総長あての書簡では、具体的に「手に地球を持った救世主の姿、御変容、群衆に説教するキリスト、聖母、三王の礼拝、聖人像」の版画を大小二種類送ってほしいと頼んでいるので、特に日本人に好まれていたのかもしれない。つまり、中央上層の聖母子像は日本人好みに作りかえられていると言える。また、上下層に渡っているが、聖母子と聖母子を礼拝するロヨラとザビエルの配置は、ピエール・ミオット版刻の《路傍の聖母と聖イグナティウスと聖フランシスコ・ザビエル》(図3)<sup>10</sup>の版画の配置と同様である。この版画は、イエズス会士たちが崇拜する《路傍の聖母》と呼ばれるイコンがイル・ジェズ聖堂に安置された一六三八年以降の作品であるが、特に二聖人は容貌、顔の向き、所作まで非常によく似ている。同様の聖母子と諸聖人の配置は一六一九年以前のヴィーリクスの版画(図4)にも見られ、イエズス会では流通した類型であったと言える。

このように《マリア十五玄義図》は、西洋の伝統的な《ロザリオの聖母と十五玄義》のイコノグラフィとは異なり、イエズス会士のモチーフを中心にさまざまな要素が取り込まれている。その制作にあたっては、さまざまな粉本が用いられていることもわかる。この論考では、原田家本の「神殿奉獻」に焦点を当て、異なる主題の要素をも組み込んだ可能性を指摘したい。まず、十五玄義を冥想するロザリオの祈りの西洋における普及とその歴史、及びそのイメー

ジについて簡単に言及し、次に日本におけるロザリオの祈りの浸透をイエズス会学林によって出版された書籍を中心に視ていく。ロザリオ信仰は日本においても聖母とキリストを称える敬虔な日々の祈りとして推奨されていた。最後に原田家本の「神殿奉獻」場面について考察する。凶像モチーフとして組み込まれたであろう別の主題について検討し、その制作の背景を推察する過程で制作年代についても言及したい。

## 二、西洋におけるロザリオの祈りと十五玄義図

### 1 ロザリオの祈り

ロザリオの祈りは実践の方法が簡単でありながら、キリストとマリアの生涯の諸場面（玄義）を瞑想することで、救いの秘儀を思いめぐらし、父なる神に賛美と感謝を捧げることができるため、その端緒から聖職者からも民衆からも非常に支持された信仰であった。<sup>11</sup>その初期の普及の担い手はドミニコ会であり、一四七五年ケルンでロザリオ信心会が創設されたのを皮切りに各地で次々と信心会が設立され、その信仰はヨーロッパ中に広がった。教会側は、キリストとマリアの生涯の玄義を瞑想するこの祈りを、徳を実践し罪を犯さないように導くものとして熱心に推奨し、ロザリオの祈りはカトリック改革やレバントの海戦など何度も興隆の推進力を得て、また世界布教の波に乗って南米やアジアにまで伝えられて現在に至る。ロザリオの祈りは信心会を通して大きく普及したが、その信心会はドゥエーのドミニコ会士アラヌス・デ・ルペ（一四二八頃—

七五）によって構想された。<sup>12</sup>アラヌスの意志を継ぎ一四七五年にケルンのドミニコ会修道院の修道院長ヤーコブ・シユプレンガーによってロザリオ信心会が設立され、その規則は教皇シクストゥス四世から承認を受けた。その際、祈りを唱えることに対する贖宥が發布された。<sup>13</sup>その初期の伝道に携わった人々はすべて改革派の教会に属していたが、改革派運動は厳しい戒律への回帰とともに世俗の人々を敬虔な生活へと導く務めも再認識させるものであった。キリストの模倣という徳の実践であるロザリオの祈りは改革派運動の精神と合致して強く推奨されたのである。イエズス会の創始者イグナティウス・デ・ロヨラもまた改革派運動の一つ、「新しい信仰（デヴォティオ・モデルナ）」に携わった人々の著作に大きな影響を受けており、その目的が同じであるロザリオの祈りはイエズス会の海外布教においても宣教に用いられたのである。

ロザリオ信心会の普及と発展においてはカトリック改革が大きな推進力となる。プロテスタントは聖母信仰や聖画像崇拜を否定したが、特にロザリオの祈りに関して、外的道具を用いて機械的・習慣的に定型化した祈りを繰り返すことは真の祈りではないとルター自身によって直接批判されていた。<sup>14</sup>そのためロザリオを唱えること自体がカトリックの主張となったのである。カトリック改革運動のプロテスタントに対する反発は十五世紀後半にトレント公会議を通して整えられたが、そこではまた、聖職者においては秩序と厳格さを回復するものであり、民衆に向けては禁欲的な規律を伴う信心会が推奨された。<sup>15</sup>ロザリオ信心会もまたあらゆる都市に設立されるようになる。一五六九年九月十七日ドミニコ会出身のピウス五世が発布

した勅書『Consueverunt Romani Pontifices』はロザリオのマグナカルタと目され、ロザリオの起源、名前、本質的要素、効用、目的、伝道の方法が書かれている。<sup>16</sup> 次なる推進力は一五七二年のトルコ軍に対するレパントの海戦の神聖同盟の勝利であった。教皇ピウス五世は再び『Salvatoris Domini』を發布し、異教徒への勝利はロザリオの聖母の恩恵であるとし、これを記念する典礼を創始した。翌一五七三年、グレゴリウス十三世は『Monet Apostolus』で、ロザリオの祝祭を創始し、それを十月の最初の日曜と定め教会暦に組み入れた。ここには信心会の設置やその特権、規則についてのおびただしい記録がなされている。その後、ロザリオの祈りの手引書が多く出版されるようになるが、一五七三年の『至聖なる聖母のロザリオの玄義について瞑想するための教えと心得』と一五七七年の『比類なき神の母マリア』の著者であるガスパル・ロアルテとペトルス・カニシウスはともにイエズス会士であった。<sup>17</sup>

## 2 十五玄義図

十五玄義は、円形もしくは四角いフォーマットで画中に描かれるときもあれば、別々に制作されて祭壇で組み合わされることもある。その構成はロザリオの聖母と組み合わされるとき、一連のイメージをかためて中心場面である聖母子のイメージと上下の関係で配されるものもあるが、聖母子を取り囲むように描かれるものが多い。後者の場合、数珠もしくは薔薇の花冠の一部として表現されるものも多く、これは伝統的な聖母のマンドラ（舟形光背）を踏襲したものと考えられる。一方、四角いフォーマットの十五玄義の諸場面が

中心場面を囲むものはイタリアの祭壇画に多くみられ（図5）、アントニオ・テンペスタ（図6）のもののように版画でも普及した。イメージは文盲を教育する手段、つまり信仰の秘蹟を図解し、信者の信仰を手助けするための手段であった。ロザリオは「民衆の聖書」とも呼ばれたが、それは十五玄義の瞑想を助けるイメージを介して、信仰の秘蹟を説明し提示されるのに適していると考えられたためである。

### 三、日本のロザリオ信仰

日本ではロザリオの祈りはイエズス会によって導入され、公教要理（カテキスム）の日々の復唱として広く浸透していた。河内・飯盛城主三好氏の家臣で小領主の三箇頼照サンチョは十三歳の息子に信仰生活に関する規則を与え、聖母マリアのロザリオの祈りを三つに分けて毎日、朝・昼・夜に祭壇の前に跪いて祈るよう指導して<sup>18</sup>おり、また、キリシタンたちはこぞってコンタツ（ロザリオの数珠）を欲したという。

一五九二（元禄元）年に天草のイエズス会学林から出版され、公教要理の教本として広く普及した『ドチリナ・キリシタン』（文語ローマ字綴、東洋文庫所蔵）の中の一文には、「五十遍のオラシヨは十五のミステリヨとて五カ条は御悦、五カ条は御悲、今五カ条はゲロウリヤの御理に対して申し上げ奉るなり、この十五カ条の題目は板木に開きたる一紙に在り」とあり、十五玄義のイメージが付録されていたことが推察される。<sup>19</sup> またこの書は、一六〇〇（慶長五）年

に国字本、ローマ字本ともに再版され、その中ではより詳しく「ロザリオの十五の観念」が説かれ、「第四 アベマリヤの事」には、「たつきビルゼン(童貞)マリヤのロザリオとて百五十ペんのオラシヨの事」、「御よろこびのくはんねん(観念) 五かでの事」「かなしみのくはんねん五かでの事」「ゴラウリヤ(栄光)のくはんねん五かでの事」、「コロハのオラシヨの事」が書かれている。<sup>20</sup>さらに一六〇七(慶長十二)年には『スピリツアル修行のために撰び集むる珠冠のマヌアル』(文語ローマ字綴、長崎、大浦天主堂所蔵)が長崎で出版されたが、この書の第一部はイエズス会士ガスパル・ロアルテの著作から「ロザリヨ十五のミステリヨのメヂタサン(瞑想)」及び「御パシヨンを観ずる道を教ゆる事、並に御パシヨンのメヂタサン」に宛てられ、ロザリオの祈る際の心得を詳細に説いている。<sup>21</sup>このようにロザリオの祈りはイエズス会の出版によっても強く推進されてきたことがわかる。<sup>22</sup>ちなみに同じくイエズス会学林から京都で出版された『こんてむつすむんぢ』(文語国語、天理図書館所蔵)は『イミタテオ・クリステイ』の訳本であるが、これはデイヴォテオ・モデルナ運動から生じた、ヨーロッパにおいても広く普及した著作であり、宣教師たちは祖国と変わらない水準の宗教教育を日本人にも施していたことがわかる。

ヨーロッパにおいて、ロザリオの祈りは信心会を通して広く普及したものだだったが、日本でもこんふらりあ、もしくは組・講は隣人愛の実践として組織され、イエズス会が指導したコンフラリアでもロザリオの毎日の朗唱が義務付けられていた。<sup>23</sup>最初のロザリオ信心会はフランシスコ会士によって設立された。一五九八年七月にひそ

かに再来日したフランシスコ会士ヘロニモ・デ・ヘスース神父は、スペイン船の関東来航に強い意欲を持っていた徳川家康から江戸に教会建設用地を与えられ、翌年、ロザリオの聖母に捧げた小教会を献堂した。また同神父は、マニラのドミニコ会から同教会に「ロザリオの組」を設立する許可を得ており、日本で最初のロザリオの組が江戸の教会に設立された。<sup>24</sup>イエズス会以外の修道会である、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグステイノ会は一六一一年頃までには各地にコンフラリアを設立していた。ドミニコ会の管区長代理フランシスコ・モラレスは、一六〇四年初めに眼病治療のため下甕島から長崎に赴いた折、乏しい日本語にもかかわらず「ロザリオの組」を設立し、滞在一週間で二万人以上を会員にしたとされる。<sup>25</sup>

#### 四、《マリア十五玄義図》の「神殿奉献」場面

ここで《マリア十五玄義図》に戻って、喜びの玄義の四番目、神殿奉献の場面に注目したい(図7)。キリストの神殿奉献とは四十日間の産後の清めの期間が過ぎた後、モーセの律法にしたがって幼子を主に捧げたことである(ルカ二・二二―三三―三四)。イエスを連れてたヨセフとマリアが神殿に入ると、主のつかわず救い主を見るまで死ぬことはない聖霊のしるしを受けていたシメオンは、幼子イエスが「異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光」であると感得し、祝福を授けるのである。したがって喜びの玄義に含まれている。<sup>26</sup>

神殿奉献の図像は、通常、神殿内でマリアがキリストをシメオン

に差し出す、もしくはシメオンがキリストを抱く場面が描かれ、ヨセフは律法にある通りの「山鳩一つがい」の犠牲の捧げものを持っている場合が多い。そして、神殿奉獻の祭壇はほぼ必ずと言っていいほど四角のものが描かれる。しかし、原田家本ではマリアがイエスを差し出しているが、クロスを張った祭壇は円形である。先行して描かれた東家本では、カーテンがかかる室内でヨセフがキリストを差し出しているが、置かれた祭壇は四角い(図8)。イエズス会学林の画学舎で学び、キリシタン美術の制作に携わった日本人画家は粉本を用いたと言われており、この変化は創意工夫とは考えにくい。

一方、西洋のイコノグラフィにおいて、聖堂内の場面で円形の台が登場する例が比較的多いのは「割礼」の場面である。<sup>27</sup> 割礼は幼子の生後八日目に施され、そのときイエスと名付けられた(ルカ二:二一)。割礼は、ユダヤの伝統では父親の家で行われ、モーヘールと呼ばれる専門家が施術を行うが、絵画では神殿に場面設定され、祭司の被り物をかぶる人物が描かれることも多い。この主題でも四角い施術台が描かれることが多いが、円卓も登場する。たとえば、ジョヴァンニ・ベッリーニ(図9、一四八〇—一五三〇年、ヴェローナ、カステル・ヴェッキオ)、ジョヴァンニ・ブージ(図10、一六世紀前半、ローマ、パラッツォ・デイ・ヴェネツィア)の作品に見られるし、トンマゾ・デイ・アンドレア・ヴィンチドールは小ぶりのサイドテーブルのような台にイエスを立たせている(図11、一五一〇—二五年、パリ・ルーブル美術館)。このようにイタリアでも作例があるが、圧倒的に多いのは北方である。ベルトラムの画

家(図12、一四〇〇—一〇年、多翼祭壇画の一部、ハンブルグ美術館)、ジョス・リーフェリンクス(図13、一五世紀末、アビニヨン、プティ・パレ美術館)、ヤン・ファン・コニクスロー(図14、一六世紀前半、ルーアン美術館)、アドリアーン・イゼウブランドの《七つの悲しみ》の一部(図15、一六世紀前半、ベルギー王立美術館)、聖ゼヴェリンの画家(図16、一六世紀前半、ルーヴル美術館)、ローマ、パラッツォ・バルベリーニ所蔵の一六世紀ドイツの作品などがある。画家たちが円形の台を選択したのは、おそらくは流れる血を受けた水盤、もしくは割礼のシンボリズムに由来するのである(図17、18)。これらは十六世紀前半までの作品であるが、《マリア十五玄義図》と同時代にも丸い施術台が描かれている。イエズス会のために多くの仕事をし、輸出を通して十六世紀後半から十七世紀にかけて世界中の宗教美術に影響を与えたとされる版画家、ヒロニムス・ヴィーリクスが<sup>28</sup>円形の台を選択しているのである。割礼の祈りの一葉(図19、一五九五年)、および「聖母伝」中の割礼の版画(図20、一六一九年以前)、「サルヴェ・レジーナ」中のロザリオの円形の中にも描かれている同主題、さらにはイグナティウス・ロヨラ自身が指示し、ヘロニモ・ナダルに監修させた『福音書画伝』<sup>29</sup>の挿図(図21)中でもまた、キリストが寝かせられる台は丸い。<sup>30</sup>

現存するマリア十五玄義図二点は、ロヨラとザビエルの存在からわかる通りイエズス会士たちが作らせたものであるが、<sup>31</sup>割礼はイエズス会にとって特別な意味があった。修道会の名前はイエスの名からそのまま採られたものだが、イエスと命名されたのが割礼の当日なのである(「八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎

のまえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた」。イエズス会の本部であるローマのイル・ジエズ聖堂の主祭壇画は、一五八七年ファルネーゼ枢機卿によってジローラモ・ムツイアーノに注文されたが、この主題に捧げられており、幼児キリストが実際に「イエス」と名付けられたときを記録しているのである。また、イエスの名前は割礼の手術を通して流された最初の血と結び付けられ、のちの受難の血とも関連付けられた。<sup>32</sup> イエズス会はカトリック改革運動の先鋒として、異教や異端を改宗させるため決死の覚悟で伝道に赴くべく修道士たちを育成していたので、磔刑で流れる血とキリストの名前とのつながりはイエズス会士たちの現実だったのである。イエズス会の多くの聖堂でこの主題に祭壇が捧げられ、<sup>33</sup> ほぼ元旦に来る割礼の祝日はイエズス会の最も重要な祝賀である。伝来する《教会暦祝日図絵》(図22)にも、割礼は一月の祝日として最も目立つ上段中央に配置されている。<sup>34</sup>

ここまで割礼のイコノグラフィについて詳述したが、だからといってマリア十五玄義図の喜びの玄義、第四場面が割礼を表している、と言いたいわけではない。割礼と神殿奉献は西洋の図像伝統においても日付が近いめしばしば混同された。<sup>35</sup> また、前述の当時の信徒の必読の書『ドチリナ・キリシタン』にも、「御よるこびのくはんねん五かでの事」の第四は「御あるじの御たんじやうより四十日めに、御ははさんたまりや御はつと(法度、すなわちモーセの律法)にまかせ、御子<sup>36</sup>をみだう(御堂)にささげ玉ふ事」として、ロザリオの祈りの喜びの玄義では神殿奉献を瞑想することが明記されている。<sup>36</sup>

しかしながら、原田家本マリア十五玄義図の神殿奉献場面は通常のイコノグラフィとは言い難く、割礼場面を表したようにも見えることは確かである。つまり、主題の意味まで含んでいるかどうかは議論の余地があるとはいえ、世界中に頒布したヴィーリクスの版画などを通して、別の主題の図像を組み入れているといえるのではないだろうか。同様のことは原田家本の栄光の玄義の第四場面「聖母被昇天」にも当てはまる(図27)。画面下方に空の墓と使徒がいることから、被昇天の場面を表していることは明らかであるが、聖母に冠が被せられている。これは東家本には見られない(図28)。西洋の聖母被昇天のイメージでは、上昇していく聖母が天使によってこれから戴冠されようとする様子を描写するものもある。しかしすでに戴冠された聖母を表すものではなく、これは聖母子の単体像や無原罪の聖母から採られたと予想される。三日月を踏んで立つ聖母子はデューラーの版画に由来するが、ヨハンネス・ヴィーリクスはそれを模刻し、ヒエロニムスはまた別のヴァージョンを作成している(図29)。聖母単体として表される無原罪の聖母は十二の星が環状になって聖母の円光として表されるが、それを冠に見立てると、ヴィーリクスのまた別の版画(図30)の両手を合わせて俯く同主題と非常によく似ている。そもそもマリア十五玄義図は、聖母、救世主としてのキリスト、諸聖人、聖餅と聖杯、ロザリオの十五玄義と多くの要素が組み合わされたものである。制作年代が原田家本より早いとされている東家本と比較すると、聖人の数が増え、十五玄義の諸場面にも種々の変化が見られるが、その過程でより多くの聖画像のモチーフを取り込んだように思える。

制作年代については、様式や技術・材料よりも、日本でキリシタンが迫害され、宣教師たちが追放されていた状況とロヨラとザビエルの名前の文字の前のSPをどのように解釈するかによつて諸説分かれる。西村氏は、SPは聖人もしくは福者にしか冠せないとして、ザビエル、ロヨラともに列福していた「慶長後期から元和初年」(二六一〇年代)としたが、ザビエルの列福の年代を間違えている。<sup>38)</sup> 坂本氏は、SPは単に「聖なる神父」であるので列聖前でも付与することができると例証し、大追放以後から列聖が日本に知らされる前の一六一四―一六二四年とする。<sup>39)</sup> 若桑氏は一六二三年以降でも潜伏中の宣教師や信者らが家の中で聖画像を拝むことができたと文献から明らかにし、列聖後の制作と考えた。<sup>40)</sup> 制作年代が二聖人の列聖の前であるか、後であるかは、南米やほかのアジア諸国におけるイエズス会での取り扱いを検討する必要があると思われるが、日本におけるイエズス会士たちも二人の列聖を切望していたことは確かである。現存するマリア十五玄義図二点はイエズス会の宣教師及び信者たちに礼拝されたものであることは明らかであるが、日本におけるロザリオ信仰に関して言えば、一六二〇年頃から、それまで普及に貢献したイエズス会と教皇からロザリオ伝道の認可を受けたドミニコ会との対立が熾烈化していた。一六〇九年から長崎で本格的に宣教活動を開始したドミニコ会士たちは自分たちのロザリオの信心会が贖宥を有する真実のコンフラリアであると主張して、イエズス会の設立した信心会を偽りであると批判していた。それに対して、一六二三年三月七日付、イエズス会管区長コロウス以下十二名の連署になる文書には、「ロザリオの玄義を知れ渡るようにし、その観

想の教えを与えたのはイエズス会であり、ドミニコ会士たちが日本に渡来する前に、ロザリオの十五玄義に関する一書を日本文字で印刷し、その観念の方法、また聖母の祈りを唱える方法について教えてきた」とあり、また、「我々が多くの入費を投じて日本文字で印刷した十五玄義の書は、施しとして配布し、他の修道会の宣教師たちが、その信者たちのためにこれを求めるときには惜しまず与えてきた」と自分たちの功績を主張している。<sup>41)</sup> この修道会間の不和は旧来のイエズス会の信心会に入っていた会員たちの熱意を失わせるほどの混乱と動揺を引き起こしたと言われ、イエズス会士たちはドミニコ会士たちに「敵意のごとき強い感情」を抱き、その活動から信徒たちを引き離そうと躍起になっていたという。<sup>42)</sup> イエズス会側には、実際の列聖はともかく、修道会の創設者と実際に来日して布教活動をおこなった東洋の使徒を大きく称え、彼らとロザリオの祈りとを結び付けるマリア十五玄義図を制作する必要があったといえるのは一六二〇年頃以降である。

## 五、結論

日本には多くの版画や宗教作品が持ちこまれて布教がなされており、カトリック改革の動向に従ったきちんとした宗教的教育もなされていた。しかしながら、キリシタンの禁制迫害や修道会間の不和などの背景、さらにはさまざまな功德を期待する日本人の趣向もあって、ヨーロッパの正統な「ロザリオの聖母と十五玄義」のイコノグラフィの伝統から外れた、多種多様な図像を取り合わせたイ

メージが制作されたと推論できるようである。

註

- (1) 西村貞「瑪利亞十五玄義図の研究」『初期洋画の研究』全国書房、一九四五年(一九七一年)、二二二―二七三頁。坂本満、「南蛮美術と洋風画」『原色日本の美術』第二〇巻、小学館、一九八〇年、七三頁、図二十六、二十七。神庭信幸他「京都大学所蔵『マリア十五玄義図』の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七十六集、一九九八年、一七五―一九六頁。坂本満「マリア十五玄義図の図像について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七十六集、一九九八年、一九七―二〇〇頁。若桑みどり「日本における聖母のタベルナクル―聖母十五玄義図」『聖母像の到来』青土社、二〇〇八年、一七七一―二五八頁。
- (2) 新村出「攝津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」『吉利支丹遺物の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究报告第七冊)岩波書店、一九三三年、九―一四頁。神庭信幸他「東家所蔵『マリア十五玄義図』の調査―付、京都大学所蔵『マリア十五玄義図』旧蔵家屋の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第九十三集、二〇〇二年、一〇三―一一六頁。
- (3) 鈴木利章「東西文明の一接点(上) 旧高槻音羽地区発見のマリア十五玄義図と椿」『文化学年報』九号、一九九〇年、二一九―二二二頁。鈴木利章「東西文明の一接点(下) 旧高槻音羽地区発見のマリア十五玄義図と椿」『文化学年報』十号、一九九一年、一八七―二六〇頁。
- (4) ザビエルの図像に関しては、木村三郎「ニコラ・プッサンとイエズス会図像の研究」中央公論社、二〇〇七年、三〇六―三二二頁。
- (5) ユダの代わりに十二使徒に加えられた聖人。
- (6) K. KÜNSTLE, *Ikongraphie der christlichen Kunst*, 1, Freiburg, Basel, Wien, 1926, pp. 638-646; L. RÉAU, *Iconographie de l'art chrétien*, 2-2, Paris, 1955, pp. 120-122; E. KIRSCHBAUM, *Lexikon der christlichen Ikongraphie*, 3, Roma, Freiburg, Basel, Wien, 1968, pp. 563-572; A. PIGLER, *Barockthemen: eine Auswahl von Verzeichnissen zur Ikongraphie des 17. und 18. Jahrhunderts*, 1, Budapest, 1974, pp. 512-19; J. FURNER, ed. *The Dictionary of Art*, 27, London, 1996, pp. 158-160.
- (7) 拙論、「ロザリオの聖母研究」博士論文、神戸大学文学部研究科、二〇一二年。
- (8) ヴィーリクススの同じ図像ではロザリオの数珠が取り囲む。
- (9) 坂本、前掲書、二〇〇二年、二〇〇―二〇四頁。たとえば、《救世主としてのキリスト》東京大学総合図書館、銅板油彩、一五九七年(図4、原図はヒエロニムス・ヴィーリクス版刻、図5)。《童形キリスト受難表象図》東京国立博物館。バレット写本の挿図。『ドチリナ・キリシタン』扉絵、文語ローマ字綴、東洋文庫所蔵。天草、一五九二年刊。『ごちりな・きりしたん』扉絵、文語国語、天草刊、バルベリーニ図書館。『スピリツアル修行のために集むる珠冠のマヌアル』扉絵、文語ローマ字綴、長崎、大浦天主堂所蔵、長崎、一六〇七年刊など。
- (10) *Catalogo mostra, Saini, site and sacred strategy: Ignatius, Rome and Jesuit urbanism*, Biblioteca apostolica vaticana, a cura di T. M. Lucas, 1990.
- (11) ロザリオ祈りの歴史については、『カトリック大辞典』上智大学、獨逸ヘルデル書肆共編、富山房、一九四〇年、五、五一―五二二頁。『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会編、研究社、一九九六年、四、一四四―一五〇頁。A. WINSTON-ALLEN, *Stories of the Rose. The Making of the Rosary in the Middle Ages*, University Park, 1997. 森野ふゆ子「コンタツ論」『純心人文研究』十四(二〇〇八年)、一一五―一三二頁。
- (12) アラムスの生涯については G. G. MEERSSEMAN, *Ordo Fratemitatis. Confraternie e pietà dei laici nel Medioevo*, vol. 3, Roma, 1977, pp. 1149-51; S. ORLANDI, *Libro del Rosario della gloriosa Vergine Maria*, Roma, 1965, pp. 40-44. ロザリオ信心の歴史については G. G. Meersseman, *cit.*, 3, pp. 1157-60; S. Olrandi, *cit.*, pp. 50-53.
- (13) G. G. Meersseman, *cit.*, 3, p. 1214, Documenti 1; A. D'AMATO, *La Devozione*

*a Maria nell'ordine domenicano*, Bologna, 1984, pp.57-69.

- (14) A. Winston-Allen, *cit.*, p.130, n.89.
- (15) C.F. BLACK, *Italian Confraternities in the Sixteenth Century*, Cambridge, 1989.
- (16) A. D'Amato, *cit.*, p.73.
- (17) L. GASPARI, *Istruzione et auvertimenti per meditar i misteri del Rosario, della Santissima Vergine Madre Raccolti per ... P. Gasparo Loarte ... della Compagnia di Giesu*, Roma, 1573; P. CANISIUS, *De Maria virgine incomparabili, et dei genitricis sacrosancta, libri quinque...*, Ingolstadt, 1577.
- (18) 五野井隆史『キリシタンの文化』日本歴史叢書、吉川弘文館、二〇一二年、五四頁。
- (19) 西村貞、前掲書、一二六頁。
- (20) 『吉利支丹文学集』新村出、柀源一校註、二卷、東洋文庫(五七〇)、一九一七—一六〇年(一九九三年)、平凡社、三三—四〇頁。
- (21) 林田明『スピリツアル修行の研究』風間書房、一九七五年。
- (22) 『吉利支丹文学集』一卷、一七七—二八八頁。
- (23) 五野井隆史「一六一八年、ジェロニモ・ロドリゲス作成の「組ないしコンフラリアに関する覚書」について—解説と翻訳」『サビエンチア 英知大学論叢』四〇、二〇〇六年、A 一—A 十九頁。
- (24) 五野井、前掲書、二〇一二年、九二頁。
- (25) 五野井、前掲書、二〇一二年、二二七頁。オルファネール『日本キリシタン教会史』井手勝美訳、ホセ・デルガード・ガルシア注雄松堂書店、一九七七—年参照。
- (26) シメオンは次の句で幼子の受難に言及し、マリアに対しても「あなた自身も剣で胸を刺し貫かれるでしょう」と預言するため、「聖母の七つの悲しみ」のイコノグラフィでも登場する場面である。また、聖母のお清めの祝日でもある。
- (27) L. Réau, *cit.*, 2-2, pp.254-26.
- (28) ヴィーリクス一族の世界的影響に関しては、木村、前掲書、三一五頁。
- (29) ヴェロニモ・ナダル(一五〇七—一八〇年)はイエズス会最初の十人のメンバーのうちの一人で、ローマの代理としてヨーロッパ中のイエズス会士たちを訪れ、会憲の指導と実施に努めた。J. BRODRICK, *Il progresso dei Gesuiti*, Milano, 1966, pp.157-202. 復刻版が神戸大学に所蔵される『*Evangelicae historiae imagines*』はキリストとマリアの生涯の百五十三場面が描かれた大ぶりの挿絵本である(一五九三年刊行、一五九四、九五五年に注釈つきの『*Adnotationes et Meditationes in Evangelia* (福音書の注釈と瞑想)』として典礼暦順に並べ替えられ再版)。ナダルが場面選択から構図まで指示し、各場面に付随する注釈を作成した。下絵はフィアンメリとベルナルディーノ・パッセリ、版刻はマルティン・デ・フォスとアントン・ヴィーリクスによってなされ、出版・刊行は一五九三年で彼らの死後であるが、出版者はアントワープのクリストフ・フランタンとマルティヌス・ヌテイリスである。伝道への心構えと瞑想のための助けとしてより効果的になるように、聖書の物語を活気に満ち、現実的なものとして描かせた。G. A. BAILEY, *Between Renaissance and Baroque: Jesuit Art in Rome 1565-1610*, Toronto, 2003, pp.10-11, 36, n.34に詳細な参考文献。
- (30) ヴィーリクスの二枚の版画と『福音書画伝』の挿図はヨセフではない初老の男性がイエスの手足を押さえているが、ユダヤの伝統に沿ったものと言える。原爆で焼失した長崎のマリア十五女義図にはフランシスコ会士が描かれている。
- (31) H. HIBBARD, "Ut picturae sermones", in *Architettura e arte dei gesuiti*, a cura di R. Wittkover e I. B. Jaffé, Milano, 1972, p.31.
- (32) ジェノヴァのイエズス会聖堂のルーベンスの作品など。
- (33) 坂本、「南蛮美術と洋風画」前掲書、五八頁、図四五。
- (34) 割礼は産褥期に行なわれたことになっているため、神殿に場面設定するならば、本来マリアは入ることができない。図像伝統においては、施術の刃にお

びえるイエスをヨセフが支える作例も見られるが、より時代考証に則したものと見える。グリーンビル、ボブ・ジョーンズ大学美術館のロレンツォ・サバティーニの《割礼》(図23、一五六四年頃)や、ローマ、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂のドメニ・パッシニャーノのフレスコ(図24)などである。割礼との主題の混同と言えるかはわからないが、イル・ジェズ聖堂左第二礼拝堂のフレスコ(図25、ニッコロ・チルチニャーニ、一五八〇年代)やナダールの《神殿奉獻》(図26)では、ヨセフがシメオンにイエスを捧げている。そのためヨセフがキリストを捧げる東家本はイエズス会の神殿奉獻の図像伝統に則していることになる。

(36) 五野井、前掲書、二〇一二年、八三―八五頁。

(37) イエズス会の無原罪の聖母の信仰に関しては異論もあるが(徳山光「雪のサンタ・マリア」図の黒子(ほくろ)、『鹿島美術財団年報』十三別冊、一九九六年、四三―四三三頁)、ボローニャのイエズス会のサンタ・ルチア聖堂にはその当初からデニス・カルヴァールトの《無原罪のお宿り》の祭壇画があり、一八五四年にその教義が公認されたときイエズス会が大きく関与したと言われている。

(38) 西村、前掲書、一四九―一五〇頁。

(39) 坂本、前掲書、一九九八年、二〇七頁、注二十二。同、「日本初期洋風画」『日本の美術』八〇、至文堂、一九七三年、二九頁。

(40) 若桑、前掲書、一八〇―一八二頁。

(41) 西村、前掲書、一二七―一二八頁。

(42) 五野井、前掲書、二〇一二年、二三六―二三九頁。

〔付記〕

本論文は平成二十四年度組織的な若手研究者等海外派遣プログラムの研究成果の一部である。

宇埜直子(うの・なおこ)

平成二十四年三月 神戸大学大学院文化学研究科博士課程修了

平成二十四年四月― 神戸大学大学院人文学研究科研究員

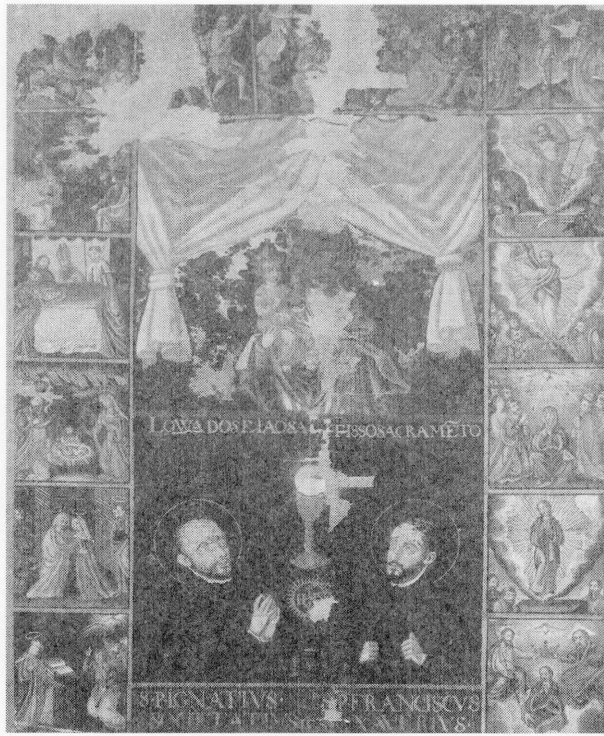


図2 《マリア十五玄義図》17世紀前半、  
茨木市立キリシタン遺物史料館（東家本）

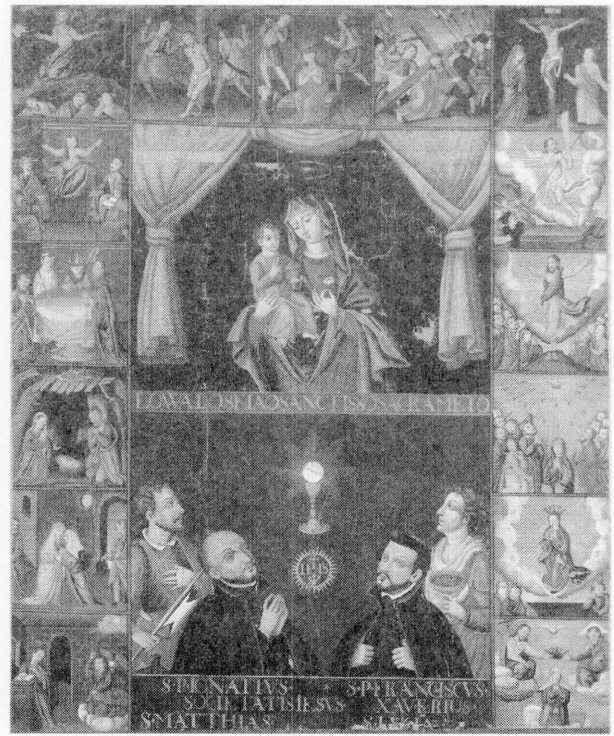


図1 《マリア十五玄義図》17世紀前半、京都大学  
(原田家本)



図4 ヒエロニムス・ヴィーリクス版刻  
《聖母子と福者シュトラウス・コストカ  
と聖バルバラ》



図3 ピエール・ミオット版刻《路傍の聖母と聖イグナティウスと聖フランシスコ・ザビエル》1638年以降



図6 アントニオ・テンペスタ版刻  
《ロザリオの聖母と十五女義》1590年



図5 バニャカヴァッロ (子) 工房  
《ロザリオの聖母と十五女義》15世紀後半、  
バニャカヴァッロ、サンタ・マリア・デル・  
カルミネ聖堂



図8 「神殿奉獻」《マリア十五女義図》(東家本)  
部分



図7 「神殿奉獻」《マリア十五女義図》(原田家本)  
部分



図10 ジョヴァンニ・ブージ《割礼》16世紀前半、ローマ、  
パラッツォ・ディ・ヴェネツィア



図9 ジョヴァンニ・ベッリーニ《割礼》  
1480-1530年、ヴェローナ、カステル・  
ヴェッキオ



図12 ベルトラムの画家《割礼》1400-10年、  
多翼祭壇画の一部、ハンブルグ美術館

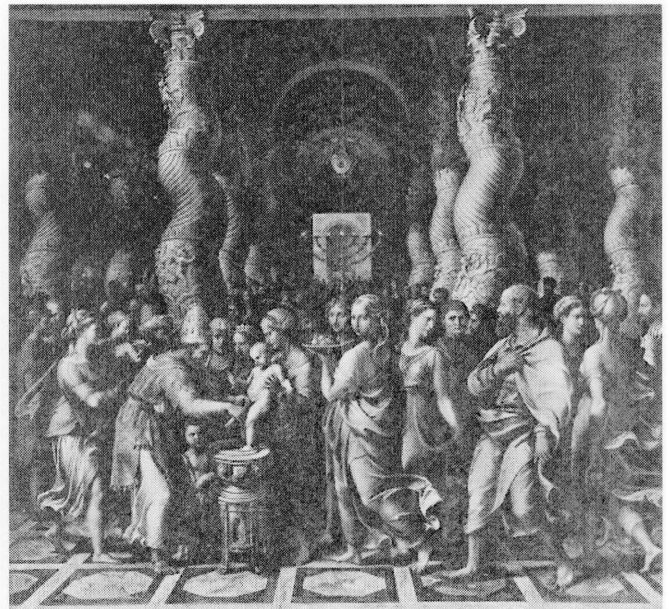


図11 トンマーゾ・ディ・アンドレア・ヴィンチドール  
《割礼》1510-25年、パリ・ルーブル美術館



図 14 ヤン・ファン・コニングスロー 《割礼》  
16 世紀前半、ルーアン美術館



図 13 ジョス・リーフェリクス 《割礼》(部分)  
15 世紀末、アビニヨン、プティ・パレ美術館



図 16 サン・ゼヴェリンの画家  
《割礼》16 世紀前半、ルーブル美術館

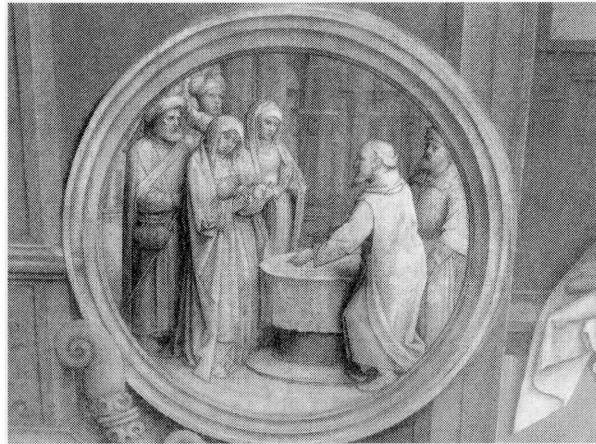


図 15 アドリアーン・イゼウブラント「割礼」  
《七つの悲しみ》の一部、16 世紀前半、ベルギー王立美術館



図 18 フラ・アンジェリコ、銀製品収蔵棚の扉の一部、フィレンツェ、サン・マルコ



図 17 ゲオルグ・ペンツ版刻の「キリスト伝」の一場面、  
1534-35 年





図 24 ドメニコ・パッシニャーノ《割礼》ローマ、  
サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂

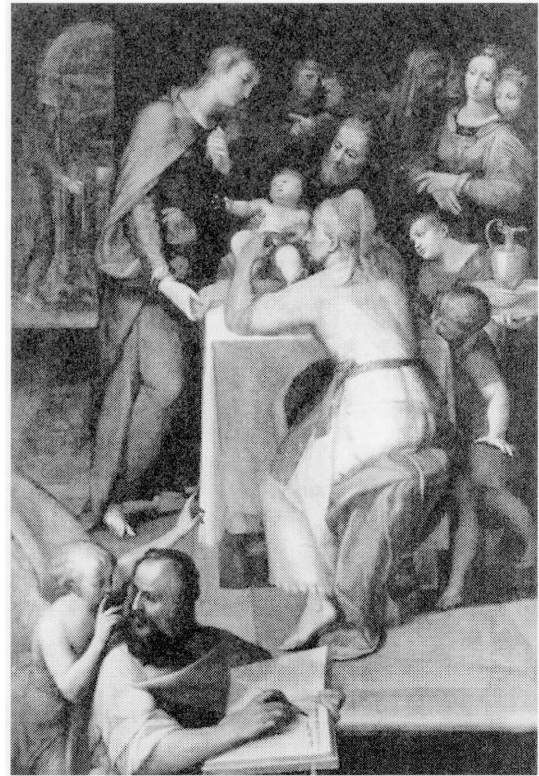


図 23 ロレンツォ・サバティーニ《割礼》  
1564年頃、グリーンビル、ボブ・ジョ  
ーンズ大学美術館

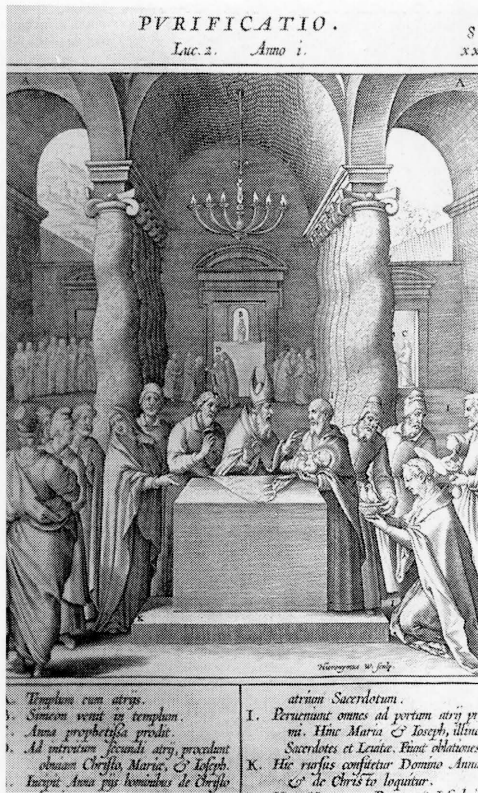


図 26 《神殿奉獻》ヘロニモ・ナダル監修  
『福音書画伝』の挿図、1593年

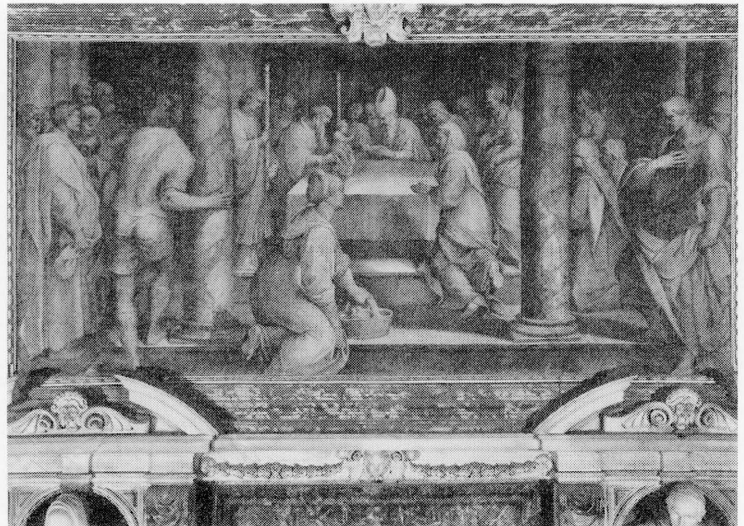


図 25 ニッコロ・チルチニャーニ《神殿奉獻》1580年代、  
ローマ、イル・ジェズ聖堂



図 28 「聖母被昇天」《マリア十五玄義図》(東家本)部分



図 27 「聖母被昇天」《マリア十五玄義図》(原田家本)部分



図 30 ヒエロニムス・ヴィーリクス版刻  
《無原罪のお宿り》1619年以前



図 29 ヒエロニムス・ヴィーリクス版刻《三日月を踏んで立つ聖母子》1619年以前